

ただのりのみやおち おちゆうど へいけものがたり
忠度都落 1：落人（『平家物語』）

へいけものがたり ぐんきものがたり だいひょう さくひん へいあんじだいまっき へいけいちぞく こうぼう
『平家物語』は軍記物語を代表する作品で、平安時代末期の平家一族の興亡
えが を描いたものです。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の
いろ じゃうしゃひつすい ことわり ゆうめい ぼうとうぶん しめ
色、盛者必衰の理をあらはす」という有名な冒頭文に示されているように、
たいらのきよもり ひき へいけ えいが けんせい ほこ げんじ ついとう う
平清盛の率いる平家が栄華をきわめて権勢を誇り、やがて源氏の追討を受け
めつぼう ありさま さまざま おま かた
て滅亡する有様が、様々なエピソードを織り交ぜながら語られています。

へいけものがたり げんけい せいぎぜんはん せいりつ い ご
『平家物語』の原型は13世紀前半には成立していたと言われますが、その後
かいてい ぞうほ く かえ かずおお いほん う へいけものがたり しょほん
改訂・増補が繰り返され、数多くの異本が生まれました。『平家物語』の諸本は、
よもの かの よ ほんけい びわほうし かた つた かた ほんけい
読み物として書かれた読み本系と、琵琶法師によって語り伝えられた語り本系
たいべつ げんざいもつと ひろ よ せいきこうはん せいりつ かた ほん
に大別されます。現在最も広く読まれているのは14世紀後半に成立した語り本
けい かくいちほん かん かんじょうのまき つ こうせい
系の覚一本で、12巻に灌頂巻が付いた構成になっています。

へいけものがたり ぶんたい かんご わごと と ま わかんこんこうぶん じゅうらい
『平家物語』の文体は、漢語と和語を取り混ぜた和漢混交文ですが、従来の
わぶん ちか ぶぶん ゆうそう たたか ばめん ふうふ じょうあい えが ばめん
和文に近い部分もあります。勇壮な戦いの場面、夫婦の情愛を描いた場面な
ど、場面の性格の違いによって文体が巧みに使い分けられています。

かくいちほん へいけものがたり まきだいなな ただのりのみやおち ねん じゆえい
テキストは覚一本『平家物語』巻第七の「忠度都落」です。1183年（寿永2
ねん みなものよしなか たたか やぶ へいけ いちもん みやこ はな にし のが
年）、源義仲との戦いに敗れた平家の一門は都を離れて西へ逃れます。
たいらのきよもり いぼてい ただのり みやこ で とちゆう ひ
平清盛の異母弟にあたる忠度も、いったん都を出るのですが、途中から引き
かえ うた ししやう しゆんぜいきやう ふじわらのとしなり やしき おとず おちゆうど かえ
返して歌の師匠である俊成卿（藤原俊成）の屋敷を訪れます。「落人」が帰
って来たというので俊成卿の屋敷は騒然となります。忠度は何のために
しゆんぜいきやう あ
俊成卿に会いに来たのでしょうか。

ほんぶん しゅってん
本文の出典：

いちこていじ こうちゆう やく へいけものがたり しんべんにほんこてんぶんがくぜんしゆう しょうがくかん ねん
市古貞次 校注／訳『平家物語②』（新編日本古典文学全集46）小学館、1994年